2．教育および農場管理運営への提言，その他

唐湊果樹園勤務44年の思い出

脇　野　一　雄

1949年（昭和24年）に鹿児島大学農学部附属農場唐湊果樹園に臨時職員として採用されて以来，今日まで一貫して唐湊果樹園の管理及び教育・研究に従事してきた。ここに，これまでの経緯を自分なりに振り返ってみた。

1942年当時の果樹園は，園地の造成の毎日であった。作業機械は何一つなく，スコップ，山鍬，造林鎌を頼りに人力だけで竹薮払い，開墾，段崩しを行った。

1954年（昭和29年）よりミカン類の新植が始められ，1961年（昭和36年）まで続き，東区はポンカン，タンカンを，中区及び西区はウンシュウミカンを，西区の西側にはビワを植栽した。面積約0.8ha，総本数800本を植栽した。

果樹園は園芸学研究室の中村三七郎教授の指導を受けており，1950年（昭和25年）当時の果樹担当の教官は若い梅田助手，蔬菜担当教官は四蔵昭夫助手であった。その時以後の果樹園担当教官は下大迫三徳（1958～1963），石畑清武（1963～1967年，現附属農場主事）助手であり，現在は串間俊文（1967年～）助手が主任としておられる。また，1950年（昭和25年）の果樹園の職員は技官：鍋倉武雄，図師ヒサの２人，臨時職員に永仮，中島，下唐湊，木元の各氏と脇野一雄の５人であった。

1964年（昭和39年）には盗難防止のために，農業物理研究室の二之方教授の指導でミカ園の周囲に目に見えにくい非常に細い銅線のコイルを張りめぐらし，線が窃盗者により切断されるとブザーが鳴るような装置を設置した。この装置の作用で昼間はよく窃盗者を捕まえたが，夜は鍋倉技官に大変な苦労をしてもらった。犬がよく邪魔して，断線箇所の補修に頭を悩まし数年間の使用に終わった。

生産物は学内，市場や個人の商店に販売した。1950年代は手車，1960年代は単車（カブ号）で届けていた。道路も悪く，モモを届けた時には痛みがひどく売り物にならなかったことが幾度もあった。学内畜産部は果樹園で牧草を栽培しており，運搬は馬車を使用していた時代である。

1966年（昭和41年）７月鹿児島県農業試験場機械化実験センターに農学科の学生とともに，３泊４日のトラクター運転研修に行き，大型農業機械への理解を深めた。そのお陰で，当年８月に大型トラクター運転免許証を取得した。当時は大学農場は勿論農家も機械化農業を目指す時期であり，学生実習における農作業機械訓練指導を行なうに当たっては随分な力となった。

1968年（昭和43年）は台風14号に塩害により柑橘園の６割に及ぶ成木樹が枯れ，苗の補植，防風樹新植に追われた。果樹園の防風対策の必要性を痛感した年であった。

トラックが購入（1978年）されてからは生産物の運搬は効率よく行なえ，生産物収入も増加した。

1981年（昭和56年）鍋倉武雄技官の定年退官の後を受け，ミカン，カキ，モモ，ウメ等の担当し，生産，管理，収穫，販売，防風樹の刈り込み，スピード・スプレイヤー（ＳＳ）による薬剤散布等を行ってきた。薬剤散布はＳＳの利用により，能率的で効果的に行なえるようになった。果樹類は年次とともに増・改植が行なわれ，現在ではミカン類100ａ，ビワ５ａ，カキ12ａ，モモ７ａ，ブルーベリー20ａ等計　144ａである。

1981年には待望の研究実習棟が竣工して，これまでになかった事務室，休憩室のほか恒温貯蔵庫や品質整理，管理室など整備された。恒温貯蔵庫は低温での果実貯蔵ができ，それまでは収穫と同時に販売しなければならなかった収穫物を計画的に販売出来るようになった。研究実習棟の建設に伴い，スレート葺きの堆肥舎が撤去され，堆肥の貯蔵・利用を野積で行なってきている。

果樹園勤務の間に，山家事が５回発生した。1951年（昭和26年）には，現在の職員宿舎のある当時の畑地で，草を山盛りしていっぺんに６カ所に火を放ったところ物凄い黒煙が舞い上がり，消防車が出動してきて，頭から水をかけられそうになったことがあった。今でこそ笑えるハプニングであるが当時は必死であった。

農場及び農学部園芸学研究室の御理解と御支援をいただき，愛媛大学及び高知大学農学部（1963年），福岡（1985年），長崎（1987年），佐賀（1990年），熊本（1991年），宮崎（1992年）の各地で果樹栽培の研修を行ったことは思い出深い。

職場で果樹類及び野菜類等の植物と深い関わりをもちながら研究への協力，学生実習の指導が出来たことはすばらしい思い出である。

唐湊果樹園に勤務して44年間を支へて頂いた鹿児島大学と農学部及び附属農場の各位に深く感謝の意を表します。